



Title	北山文庫蔵『孝子彦太夫伝』について 附翻刻
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懐徳堂研究. 2020, 11, p. 3-13
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79008
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

北山文庫蔵『孝子彦太夫伝』について 附翻刻

佐野大介

はじめに

大阪大学附属図書館の懷徳堂文庫は、江戸期懷徳堂の遺書及び重建懷徳堂の旧蔵書を中心として、重建懷徳堂関係者などから寄贈された幾つかの資料群（文庫）より構成されている。その中の一つが、重建懷徳堂最後の教授・吉田鋭雄（号は北山）旧蔵の約四四〇〇冊を収めた北山文庫である。

その中に、丹波国多紀郡黒田の孝子彦太夫なる人物の孝状を記した、山川正宣著『孝子彦太夫伝』が含まれている。仮綴六葉の写本であり、後述するように吉田の書写と考えられる。

本稿では、この北山文庫に収蔵されている『孝子彦太夫伝』（以下、北山文庫本と称する）に関する基礎的な

調査を試み、併せて翻刻を行なった。

一、山川正宣『孝子彦太夫伝』

著者の山川正宣（名、正信、のち正宣。字、子轍、また源市。号、葎園、また六倉園、静斎など。一七九〇（一八六三）は、江戸時代後期の国学者で、摂津国池田の人。本業は酒造業西大和屋第一二代当主で、和歌や書画、考証学などをよくした。著書として、神武天皇より平城天皇までの皇陵について考証した『山陵考略』や、薬師寺の仏足石に彫られた和歌に関する『仏足石和歌集解』などが知られる。

『孝子彦太夫伝』（以下、「該書」と略称）に関しては、吉田の手になる正宣伝に、

また二十三歳の時丹波多紀郡黒田村の孝子に就て、『孝子彦太夫伝』（池田森万太郎氏蔵）と云ふものを書き、尚自ら其の孝子作業の図を書いて印に附し、これを稿本の初めに貼して居るものがある。板本にはならなかつたが、此類は尚他にもあつて、敏馬浦の孝子柴野又四郎を表彰するなど、人の善を聞くを喜び、其の行状を記して世に彰はす事を楽んだ点より察すれば、其の人の為り温良篤実の君子人にして、忠孝の念に厚かつた事を知るに足るであらう。（『池田人物誌』下巻「山川正宣」²）

とある。

ここから、該書が正宣二三歳の時に成つたことや、他にも正宣の手に成る孝子評伝があつたことなどが知られる。ただ、正宣の著書に関して、これも吉田の正宣伝に、

著述として編者の寓目したものは、孝子彦太夫伝一卷、仏足石和歌集解一卷、山陵考略一卷、牡丹花三百年忌懷旧和歌卷一卷を除く外、姫島と云ふ地が何処であるかと云ふ事を考証した姫島考一卷（池田森万太郎氏蔵）、安徳天皇の遺蹟に就て構想した握蘭考一卷（同上）、孝謙天皇の事に就て考証した宗像

神社阿弥陀經碑考一卷（池田、原田長治氏蔵）、及び隨筆抄録に係る在根良記一卷、いはひの杖一卷（同上）、明史日本伝注一卷（大阪府立図書館蔵）、池田家系図一卷（大広寺蔵）がある。（『池田人物誌』下巻「山川正宣」³）

とあることなどから見るに、該書以外の孝子評伝は失われたものらしい。該書は、正宣の孝子顕彰に関して知ることのできる数少ない資料の一つといえよう。また、該書にしても、「板本にはならなかつた」、「未刊」などとされるように、広く世に知られたものではなかつたようである。⁶

二、北山文庫本書写の経緯

ここで、吉田が該書を書写・架蔵した経緯について簡単に記しておきたい。⁵

吉田は、小学校の代用教員などを経て、大阪朝日新聞社編集部につとめていた明治四五年（一九一二）満三二歳の時、病氣療養のため大阪朝日新聞社を辞し、池田に転居、療養生活を送ることとなる。転居先の地名「北山之口」より、以後「北山」を号として用いた。

転居先の池田は、酒造業や炭の生産で栄えた土地であ

り、豊かな経済のもと、学問・文化活動も盛んであった。明治四三年（一九一〇）、地域の郷土史家等が郷土史研究団体・池田史談会を設立し、以後活発な活動が行なわれていた。

大正八年（一九一九）大正天皇天覧の下、陸軍大演習が挙行され、それに伴う恩典として、国学者である山川正宣に従五位が贈られた。これがきっかけとなり、大正九年（一九二〇）、史談会より正宣の名著である『山陵考略』が吉田鋭雄の校にて刊行された。この後、史談会は、池田の文化・学術関係の先人顕彰のため、先人らの業績を『池田叢書』として刊行してゆく。その第一編となったのが、吉田鋭雄著『田中桐江伝』であった。以後、『池田叢書』は、吉田の協力を得つつ、第三編として『山川正宣集』が刊行され、以後第五編まで続く。

大正九年（一九二〇）、重建懷徳堂の書記から素読科の教師となった吉田は、懷徳堂講師であった稲束猛とともに、池田の先人についての伝記を執筆・編集し、『池田人物誌』上下巻が刊行された。この中の「山川正宣」条は吉田の執筆にかかる。

北山文庫本は、版心に「北山艸堂用紙」とある四百字詰原稿用紙を使用していることや、詳しくは後述する、池田市立歴史民俗資料館蔵蝸牛廬文庫に所蔵されている

分類番号四一七の『孝子彦太夫伝』（以下、蝸牛廬文庫本Aと称する）に、「吉田鋭雄氏の手写せられしものより写しおく」と見えることから、吉田による書写であることが窺える。識語等を欠くため筆写の時期は明らかではないが、この山川正宣伝執筆のための資料として、未だ刊行されていなかった該書を手づから筆写したものである可能性が高い。なお、北山文庫本一葉表の内題の下に、「山川正宣著 手稿本池田森万太郎氏蔵」と記されていることから、北山文庫本は、正宣の手稿本を直接書写したものと考えられる。

三、異本について

今回、北山文庫本を翻刻するに当たり、『孝子彦太夫伝』の異本について調査したところ、池田市立歴史民俗資料館蔵蝸牛廬文庫に二つの異本が収蔵されていることが分かった。「蝸牛廬」とは、北摂池田の郷土史家で、池田郷土史学会の設立者でもある林田良平氏の書斎号である。後、林田氏所有資料の主要な部分が池田市立歴史民俗資料館の所蔵となり、その資料群が「蝸牛廬文庫」と呼ばれる。

二つの異本とは、蝸牛廬文庫に、分類番号四一七・分

類番号四一八として収められるもので、その目録に、

孝子彦太夫伝 山川正宣 昭和四林田良平写本 文
化九 一冊 四一七

孝子彦太夫伝 山川正宣 昭和一三林田良平写本
文化九 一冊 四一八〔蝸牛廬文庫目録〕⁽¹⁵⁾ (二)

と記載されている(以下、分類番号四一八の『孝子彦太夫伝』を蝸牛廬文庫本Bと称する)。

これらに北山文庫本を加えた三種を実見したところ、構成上の異同として、蝸牛廬文庫本Bのみ序と本文との間に「彦太夫麴ヲホス図」(後述)を載せること、蝸牛廬文庫本A・蝸牛廬文庫本Bが本文の後に、北山文庫本に見えない「跋」と「引用書目」とを有すること、蝸牛廬文庫本Aのみ最後に識語を有すること、が認められた。その他、序及び本文の記述や内容に関しては、異体字やルビの有無などを除きほぼ異同を有さない。体裁に関しても、北山文庫本が、本文の「聖代」の上に空格を置くのに対して、蝸牛廬文庫本A・蝸牛廬文庫本Bは擡頭を用いる点が僅かに異なる外は、「領主青山侯」なる記載に、蝸牛廬文庫本Bのみ「青山侯」の上に空格を置くのが唯一の顕著な異同といえる⁽¹⁶⁾。三者ともに、かなり正確な筆

写(もしくは模刻)であるといえよう。

三者の先後関係に関しては、まず北山文庫本の内題下に、「手稿本池田森万太郎氏蔵」⁽¹⁷⁾とあり、蝸牛廬文庫本Aの識語に、

この書山川正宣翁の著なり而して稿本故森万太郎氏の秘蔵する所しかるに嗣子この書の所在をしらず故に嘗て吉田銳雄氏の手写せられしものによりて写しおくものなり／昭和四年五月二十日 良平(蝸牛廬文庫本A識語)

とあることから、蝸牛廬文庫本Aは北山文庫本を手写したものであることが分かる⁽¹⁸⁾。

北山文庫本・蝸牛廬文庫本Aともに序の末に、「次葉二正宣ノ画ケル彦太夫麴ヲホス図ヲ鐫リ之ヲ貼セリ」と記すのみにて画を収録していないのに対し、蝸牛廬文庫本Bのみ画を有している(図一)。この「彦太夫麴ヲホス図」こそ、林田氏自身が、

一、彦太夫麴造りの図 正宣筆／「孝子彦太夫伝」山川正宣著 一冊／文化九年十一月稿 昭和十三年二月良平影写(九、近世池田の画人(三〇〇例会))⁽¹⁹⁾

図一 彦太夫麴ヲホス図（池田市立歴史民俗博物館蔵）



として紹介する「彦太夫麴造りの図」であると考えられる。^{②③}ここに、「昭和十三年二月良平影写」とあるのは、昭和四年写の蝸牛廬文庫本Aの識語に「嗣子この書の所在を知らず」とあるのに矛盾するようと思われる。ただ、蝸牛廬文庫本Bには、

昭和十三年二月據池田森萬之助氏所蔵正宣手稿本於五月山麓蝸牛庵窓下影撮焉^{②④}

と書かれた紙片が挟まれており、林田氏の「良平影写」

と紙片の記す撮影日とともに「昭和十三年二月」であることから、この紙片がこの図を撮影した状況を記したものである可能性は高い。であれば、昭和四年当時代替わりの「嗣子」が所在を知らなかった手稿本は、昭和一三年当時は「森万之助」なる人物が有していたこととなる。森姓で名に「万」字を用いていることから、森万太郎氏の関係者（あるいは「嗣子」本人）であろうと思われるが詳細は未詳。

以上より、ひとまず以下のような可能性が指摘できよう。大正年間刊行の『池田人物誌』執筆のために吉田によつて手稿本より北山文庫本（彦太夫麴ヲホス図）を欠く）が書写され、昭和四年（一九二九）には手稿本が所在不明であつたため北山文庫本より蝸牛廬文庫本Aが書写される。その後、手稿本が発見され、昭和一三年に至つて「森万之助」蔵手稿本より蝸牛廬文庫本Bが書写（あるいは模刻）された、というものである。

おわりに

昭和二三年（一九四八年）四月、吉田は重建懷徳堂教授となる。しかし、同年五月一二日、自宅で脳溢血で倒れ、不帰の人となる。昭和二四年（一九四九）、大阪大

空襲での焼失を免れた重建懷徳堂の蔵書が大阪大学に寄贈され、重建懷徳堂はその歴史的役割を終える。

このような経緯より、該書を筆写した吉田は、「重建懷徳堂最後の教授」と称される⁽²⁾。これに対して、明治四年（一八七一）、江戸期懷徳堂の閉校に立ち会った教授である並河寒泉は、「懷徳堂最後の教授」と称される⁽³⁾。寒泉は幕末、幕府による陵墓の調査・修築事業である「文久の修陵」における河内国の皇陵調査に関わっており、検証のため、山川正宣の『山陵考略』を筆写している⁽⁴⁾。

江戸期懷徳堂と重建懷徳堂と両方の「最後の教授」が山川正宣の著作を筆写・架蔵していたことは、懷徳堂と正宣との学問的傾向や正宣の著作の流通に関連して、興味深い事実であるといえよう。

注

- (1) 山川正宣の伝記のまとめたものとして、「山川正宣」条（吉田鋭雄・稲束猛編『池田人物誌』下巻、太陽日報社、一九二四年、四五〇―四九三頁）がある。
- (2) 『池田人物誌』下巻、四五七―四五八頁。
- (3) 『池田人物誌』下巻、四八七頁。なお、この他、「山川正宣」条（上田万年監修『国学者伝記集成』続巻、名著刊行会、一九七八年、二二八頁）には、正宣の著作として「家集三」「景

雲遺事」の名が上がっている。

- (4) 注(2) 参照。

- (5) 『国学者伝記集成』続巻、二二八頁。緑川亨発行『増補版国書総目録』第三卷（岩波書店、一九六五年）の該書の条は所蔵者を記さず、「*国学者伝記集成による」とする。

- (6) 徳田進「孝子実伝の部」（『孝子説話集の研究 近世篇 一―十四孝を中心に―』下冊、井上書房、一九六三年）・国文学研究資料館編『古典籍総合目録』（岩波書店、一九九〇年）に該書の記載は見えない。

- (7) 本章に関しては、釜田啓市「吉田鋭雄と池田の先人顕彰運動」（『清真学園紀要』一九・二〇合併号、二〇〇五年）・藤井知敏「重建懷徳堂最後の教授・吉田鋭雄」（『池田郷土史研究』第一五号、二〇一三年）等を参照した。特に釜田氏のもの、池田における吉田の活動について詳細を極める。

- (8) 大正九年刊の初版本には、末尾に「後学丹波吉田鋭雄校」との記載があるが、大正一三年の再版本はこの記載を欠く。

- (9) 吉田鋭雄「田中桐江伝」（『池田叢書』第一編、池田史談会、一九二三年）

- (10) 岸上善五郎編『山川正宣集』（『池田叢書』第三編、池田史談会、一九二四年）。内容としては、「山川正宣歌稿」に「仏足石和歌集解」「宗像神社阿弥陀経碑考」「姫島考」が附されている。
- (11) 稲束猛については、北野裕子「稲束猛小伝―池田ルネサンス

- の旗手―」(『種智院大学研究紀要』第三号、二〇〇二年)・釜田啓市「稲束猛の韓非子講義」(『懷徳堂センター報』二〇〇七、二〇〇七年)を参照。
- (12) 吉田鋭雄・稲束猛編『池田人物誌』上下巻(太陽日報社、一九二三・一九二四年)
- (13) 肥田皓三「林田良平」(『大阪春秋』七〇、一九九三年)参照。なお、池田郷土史学会は、池田史談会の後身。
- (14) 田中晋作「蝸牛廬文庫資料について」(『関西大学博物館紀要』一、一九九五年)参照。
- (15) 池田市立歴史民俗資料館編『蝸牛路文庫目録』(二)池田市立歴史民俗資料館蔵資料目録第三集、一九九四年、一四頁。目録には共に「林田良平写本」とあるが、蝸牛廬文庫本Bは刷本のように見える。あるいは手稿本を模刻したものか。
- (16) 蝸牛廬文庫本Aを擡頭としたが、前行末尾の空格は一字分のみで、空格と実質的な違いはない。
- (17) 森万太郎氏は、池田史談会の創立メンバーの一人。「池田史談会が結成されたのは、明治四十三年とされる。……創立委員は森万太郎・岡部常次郎・林田安平(引用者注:林田良平氏の父親)……」(金田氏前掲論文)。注(3)や釜田氏前掲論文などから、多く貴重な書籍を有していたことが窺われる。
- (18) 北山文庫本の有さない跋と引用書目の由来は未詳。
- (19) 林田良平「九、近世池田の画人(三〇〇例)」(『池田郷土研究』第九号、二〇〇七年)
- (20) 蝸牛廬文庫本B有する画には、画の右側に「孝子彦太夫像山正宣画印」と記されている。
- (21) 翻刻も兼ね、当該部分の引用においては筆写に近い字体を用いた。
- (22) 例えば、湯浅邦弘編著『増補改訂版 懷徳堂事典』(大阪大学出版会、二〇〇一年)の「吉田鋭雄」条。また、藤井氏前掲論文はその題名が「重建懷徳堂最後の教授・吉田鋭雄」となっている。
- (23) 例えば、湯浅邦弘編著『増補改訂版 懷徳堂事典』の「並河寒泉」条など。
- (24) 天理大学附属図書館蔵『山陵考略』(天理蔵書ラベル)並199.80)。なお寒泉の陵墓調査に関しては、矢羽野隆男「天理大学附属天理図書館蔵 並河寒泉「陵墓調査関係資料」解題」(『中国研究集刊』出号(第五一号)、二〇一〇年・全「宮内庁書陵部所蔵 並河寒泉「陵墓調査関係資料」解題」(『懷徳堂研究』第二号、二〇一一年)・全「並河寒泉の陵墓調査幕末懷徳堂教授の活動」(『懷徳』八二号、二〇一四年)を参照。
- ※池田市立歴史民俗博物館には、資料の閲覧・写真掲載に関して格別のご配慮を頂いた。また、蝸牛廬文庫本Bの挟み紙の崩し字解説に関して、大阪大学大学院文学研究科日本史研究室の糸川風太氏と平田良行氏にご教授を頂いた。記して感謝申し上げます。

『孝子彦太夫伝』翻刻

凡例

- ・本稿は、山川正宣『孝子彦太夫伝』を翻刻したものである。
- ・底本として、大阪大学附属図書館懷徳堂文庫内北山文庫蔵本（写本、仮綴り六葉、版心に「北山艸堂用紙」とある四百字詰原稿用紙を使用）を用い、池田市立歴史民俗博物館蔵蝸牛廬文庫本A・蝸牛廬文庫本Bの二種を参照した。
- ・「跋」「引用書目」は、北山文庫本は有さず、池田市立歴史民俗博物館蔵本のみ有する箇所だが、参考のためこれらを附した。
- ・蝸牛廬文庫本Bのみ跋に、返り点・送りなが附されているが、これを省略した。
- ・翻刻に当っては、底本の字体にできる限り沿うよう留意したが、印刷の都合上改めた箇所もある。
- ・合略文字は分解して角括弧（「」）にて示した。
- ・底本は「聖代」の上に空格を置くが、これを「□」で表した。

孝子彦太夫伝 山川正宣撰【表紙】／

孝子彦太夫伝 山川正宣著 手稿本池田森万太郎氏蔵

【二オ】／【二ウ】／

から國の、ひしりの文に、孝は百のをこなひのもと、かやいへるかことく、およそ人たるもの、これを、きては、またなにのみにちにかよるへけんや、この比丹波の國黒井といへる所に、ひとりの孝子ありて、國の守より、よねなどあまた給りし事の、ゆへよしをしるしつけたる、ふみのはしかき、あるはそのすかたをうつせよと、すゝむる人あり、もとより才みしかく、筆つたなきものゝ、なすへきわさにしあらねは、こと人にあつらへてよといへとも、さらにうけひかされは、猪名のさ【二オ】／、原、いなみかたくて、有馬山のありのまゝに、しるす事になむ

文化こゝのつとし冬、しもつきつのくにさつき山の麓に住るやまかはの正宣かいふ

次葉二正宣ノ画ケル

彦太夫麴ヲホス圖ヲ鐫リ之ヲ貼セリ、上ニ憶良ノ歌ヲ書ス

銀母金母玉母奈尔世武尔、麻佐禮留
多可良古尔斯迦米夜母

山上臣憶良【二ウ】／

孝子彦太夫傳

孝經曰用天之道因地之利謹身節用以養父母此庶人之孝也
と、こに丹波の國多紀郡黒田村に一人の孝子あり、其
名をば彦太夫といへり幼年の時よりよく父母の心に叶
ひ、聊も争ひもとる事なし、兄弟四人ありて、姉二人、
次は彦太夫、妹一人なり、皆それ／＼の縁を需てかしづ
け、其身一人にて両親をやしなひ、家富たるにあらずと
いへども、婢女奴僕等をも扶持して、父母の用を弁【三
オ】／ぜしめ、其身は朝に星を戴きて田圃に出、耕作の
業に怠らず、夕には草履草鞋などをつくりて、遅く眠り、
又其間には麴を製して、近きわたりに商ひ、凡一日に多
少を論ぜず、其得たる程の銀錢を父母の前に持出で、そ
の数をしらしむ、また妹の嫁したる家もまづしくて、出
生したる女子をそだてわびぬる躰をみて、夫をも我方に
引とりて、養育する杯、仁慈の道ひとつとして關る事な
し、父は元來頑なる性なるうへ、年老たるにしたがひ、
多病にして、何かにつけ驕恣にして、食物など【三ウ】

／も種々の珍珠を好みなどすれども、彦太夫少もさかふ
事なく、其身は廉食するといへども、父母には其好む所
の魚鳥をあたへ、また父母食し終らざれば、をのれは箸
をとらず、二六時中其禮をかく事なし、斯て例歳秋の末
に至りて、米穀の収納も事終れば、此國農家のならひと
して、摂州伊丹なる酒家某が許に至りて、醸酒の役夫と
なり、其給銀なども、をのれ聊も身に納むる事なく、父
母にあたへて、其身は山川を隔つといへども、孝養家に
あるに違ふ事なし、また中年にして近隣【四オ】／より
妻を迎へけるが、天彦太夫を祐け給へるか、此つま夫に
劣らざる節婦にして、ともに舅姑に仕へて、うらなく孝
を尽しぬる事、姜詩が妻のいにしへもおもひ出られぬ、
同邑の黨はいふもさらなり、伊丹なる酒家のあるじ、ま
た其家に給仕する輩、および近隣に至るまでも、是を見
もし聞もする人の限り、感涙を催さるはなし、されば
孝感動天のことはりいちじるく、領主青山侯の聴に達し、
其ていたらく、あらかじめ御たづねありしうへ、文化七
年午の十月改て村方へ御尋の【四ウ】／事ありけるによ
り、彦太夫が行状詳に書記して奉りしかば、同じき八年
末の二月再命令ありて、大庄屋はじめ村役人彦太夫夫婦
をいさなひて、御役所へ出しかば、種々御褒賞のうへ、
御蔵米三俵彦太夫に下し賜ひぬ、誠に冥加に餘りたる事

といふべし、それより家に歸りて其米を神佛に供じ、父母にすゝめ、親族近隣にわかし與へ、はた伊丹迄も持來りて、其恩徳を人に弘めあひぬ、酒家のあるじも悦びのあまり、聊の銀をあたへて祝しぬ、然るに其後侯の御許よりかくの如き一【五才】／通到來す、

其村方彦太夫事孝心御称美之為祝儀伊丹「より」銀子送候由先達而相届候右家名相改早々可書出候已上

三月十九日 御代官所

黒田村庄屋中

さるによりて庄屋其趣ありのまゝに申上げるとなん、是も其仁心を感じ給ひての事なるべし、されば彦太夫農家に生れて、聊學問の道をもしられども、其行ひひとつとして、聖賢の教にた【五ウ】／がふ事なし、是所謂生れながらにして知るの君子といふべし、我國いにしへより孝子にとほしからずといへども、今眼のあたり、かゝる孝子をみる事實に□聖代の徳とぞいふべきなり、古人いへる事あり、不得守親不可以為人、不可以為人則禽獸也、今此書をあらはして、二三子に示す事親疎をして同じ道にいざなひ、人たるの道を尽さしめんと欲するなり、此書をみるの童蒙、竹馬にかへて是を誦せば、をのづから其徒に導くの一助ともなりなんものと、禿たる筆もてかい【六才】／つけぬる事しかり

孝子彦太夫傳尾【六ウ】

【蝸牛廬文庫本A・B有する跋及び引用書目】

跋

天地之性莫貴於人、人之道莫大於孝。嗚呼若夫彦大夫可謂能得其道矣。丹丘酒賈某著此書、以弘遠近、欲使人感發孝心。是亦不庶道乎。因識之卷尾云。

壬申冬日

靜齋主人書

文化九年壬申冬弘之

引用書目

孝經 論語

萬葉和歌集 日記故事大全

本朝孝子傳 孝子萬古傳

已上六部

【蝸牛廬文庫本A有する識語】

この書山川正宣翁の著なり而して稿本故森萬太郎氏の秘藏する所しかるに嗣子この書の所在をしらず故に嘗て吉田銳雄氏の手写せられしものによりて写しおくものなり

昭和四年五月二十日

良平